

ふくしま、とくしま、ともに輝こうプロジェクトの活動報告

原田 新¹・小野覚久²・高橋直樹²・伊槻 悟²・大岩由利恵²
坂本和歌子²・山田真理²・渡邊 凌²・佐藤高則¹・中山信太郎¹
(¹徳島大学大学院ソシオ・アーツ・アンド・サイエンス研究部)
(²徳島大学大学院総合科学教育部)

1. はじめに

東日本大震災から3年半が経過する中、各被災地域で様々な復興支援活動が行われ、一見被災地の住民は落ち着きを取り戻しつつあるように思われる。しかし、特に福島県においては、原子力災害やそれに伴う風評という特有の問題から、地域住民の不安・不信は依然として高い。

徳島大学大学院プロジェクト研究Ⅰ(中山班)では、福島県の地域住民への支援活動を目的とした「ふくしま、とくしま、ともに輝こうプロジェクト」を発足させた。本プロジェクトでは、徳島大学の福島支援プロジェクト(リーダー:中山信太郎)と連動する形で、大学院生参加型の様々な活動を行ってきた。本発表ではその中から、福島県白河市で実施された学校教員対象の教育カンファレンス、子どもたちへの運動・発育教育、乳幼児保護者心理相談会の活動報告や、風評被害対策に向けたアンケート調査の結果報告を行う。

2. 教育カンファレンス(2014/8/19)

白河市の学校教員を対象とした教育カンファレンスを開催した。まず中山が、「子ども達の未来を育む放射線教育」と題した講和を行い、学校現場における放射線教育の重要性について述べると共に、「放射線の基礎知識」「現実的対処法」「風評と向き合うには」「運動と発育」という4つの観点から放射線教育の在り方について提案した。さらに、放射線の専門家と現場教員とのコラボレーション授業の実施を呼びかけた。

また、実際に2014年6月に実施されたA中学校におけるコラボレーション授業の内容が、A中学校の教頭先生より紹介された。その際の具体的なコラボレーションとして、まず教頭先生作成の

授業スケジュール案をもとに、事前に徳島大学チームの放射線の専門家と現場教員とが複数回の打合せを行い、授業内容を洗練させた。当日の授業では、放射線に関する基礎知識の確認や、現在および将来も見据えた風評被害への対応を主なテーマとし、担任が授業を主導しながら、専門的な内容は徳島大学チームが補足的説明を加えるというキャッチボール式の進行で実施された。

3. 運動・発育教育(2014年6月~随時)

福島では子どもの外遊びの制限が課される場所もあるなど、今後子どもの健やかな発育・発達が阻害される可能性が考えられる。現状でも、子どもたちの身のこなしや普段の行動において、問題を抱える子どもが増えたという白河市の保育士からの報告もある。そのような状況に対し、本プロジェクトでは、すぐに取り入れることの出来る単純な運動で、かつ継続支援が可能な運動・発育教育の活動を開始した。まず徳島大学の荒木秀夫教授の提唱する運動理論に基づき、人間の基本的な動きを中心に構成した、「少しの練習で子どもの動きや感性が変わる」トレーニングプログラムを作成した。その後、大学院生の小野と高橋の主導で、白河市の複数の幼稚園、保育園、小学校等において、プログラムを実施した。また、荒木教授が「子どもの運動遊び」と題した、実技を伴う講演を行った所、多くの保育士から好評を得た。



Figure1 保育士対象の実技指導を行う荒木教授

4. 乳幼児保護者心理相談会 (2014/8/19~21)

震災による子どもへの心理的影響や保護者の不安に対する支援として、徳島大学の山本真由美教授の主導で行われている乳幼児保護者心理相談会に、原田と大学院生の坂本が参加した。具体的には、白河市の二つの保育園において、行動の気になる園児の行動観察、およびその観察結果を踏まえて、園児への関わり方等に関する保育士へのコンサルテーションを行った。また、白河市中心保健センターにおいて乳幼児の保護者に対する個別の心理・発達相談も実施した。原田と坂本は、各活動での陪席および補助を行った。

5. 風評被害対策に向けたアンケート調査

福島の風評被害の問題に取り組む一環として、大学院生の渡邊と伊槻の主導で、放射線に関する知識と意識に関するアンケート調査を、福島県と徳島県にて実施した。

5-1. 回答者の基本情報

回答者数は、福島で278名、徳島で76名で、性別は、福島で男性112名、女性160名、不明6名、徳島で男性46名、女性30名であった。回答者の年齢をTable1に示す。福島の回答者は全て学校の教員、徳島の回答者は地域住民であった。

Table1 回答者数および年齢

	10代	20代	30代	40代	50代	60代	不明	回答者数
福島	40	49	99	87	2	1		278
徳島	41	21	2	3	2	7	0	76

5-2. 放射線に対する関心

放射線に対して関心があるかについて、①と②もある～⑤全くないの5件法で尋ねた(Table2)。両県の平均値に対しt検定を行ったところ、福島の方が統計的に有意に得点が低い(より関心が高い)結果が示された($t(351)=-2.09, p<.05$)。

Table2 放射線に対する関心

	①	②	③	④	⑤	平均
福島	89	158	15	16	0	1.85
徳島	19	40	10	4	2	2.07

5-3. 放射線に関する知識

放射線に関する知識を調べる4つの質問への回答を求めた(Table3)。2の質問で、福島に比べ、徳島の正答率が極めて低い結果が示された。

Table3 放射線に対する知識の正答率

	正答率(%)	
	福島	徳島
1. 天然の自然放射線による被ばくはあると思いますか? (①ある、②ない、③わからない)	70.9	75.0
2. 体に入り込んだ放射性物質は、ずっと体内に残ると思いますか? (①残る、②残らない、③わからない)	57.2	28.9
3. 人が受ける被ばく線量を表す単位を、1つだけ○を付けてください。 (①ベクレル(Bq)、②グレイ(Gy)、③シーベルト(Sv))	76.3	63.2
4. 食品内の放射線濃度の基準値を、1つだけ○を付けてください。 (①100 Bq/kg未満、②500 Bq/kg未満、③わからない)	59.7	42.1

5-4. 放射線に関する意識

まず、「普段の生活の安全性」に関する質問では、両県の違いはほぼ見られなかった(Table4)。

Table4 普段の生活における安全性で気にかかる項目の割合(%)

	①生活用水	②食べ物	③その他	④無回答
福島	15.11	72.30	8.27	4.32
徳島	21.05	73.68	0	5.26

次に、「生産地を気にするか」の質問を、①とても気にする～⑤全く気にしないの5件法で、「福島の食材を食べたいか」の質問を、①食べたいと思う～⑤食べたいと思わないの5件法で尋ねた(Table5、Table6)。両質問とも、両県の平均値に対しt検定を行ったところ、いずれも福島の方が有意に得点が低い(より生産地を気にする、福島食材を食べたい)結果が示された(生産地: $t(347)=-2.20, p<.05$ 、食材: $t(345)=-6.86, p<.001$)。

Table5 食品を選ぶとき、生産地を気にしますか?

	①	②	③	④	⑤	平均
福島	57	152	13	45	9	2.26
徳島	9	37	6	18	3	2.58

(注) 欠損値の関係から、回答者数が若干異なる。

Table6 福島の食材を食べたいと思いますか?

	①	②	③	④	⑤	平均
福島	108	92	53	19	3	1.97
徳島	10	11	32	16	3	2.88

さらに、「食材を買う時の基準」の質問への回答を求めた(Table7)。買う基準として、特に「価格」と「検査の有無」に、両県の違いが見られた。

Table7 以下の食材を買うときに、基準にするものの割合(%)

	①価格		②品質		③産地		④検査の有無		⑤その他	
	福島	徳島	福島	徳島	福島	徳島	福島	徳島	福島	徳島
野菜	13.14	34.25	46.71	38.36	24.45	26.03	13.87	0	1.82	1.37
果物	12.04	31.51	51.82	42.47	20.80	26.03	13.14	0	2.19	0
米	8.42	23.29	38.83	39.73	25.64	30.14	19.78	0	7.33	6.85
魚	7.66	21.92	43.80	43.84	28.10	31.51	18.25	1.37	2.19	1.37

6. まとめ

本プロジェクトでは、大学院生教育の一環として、プロジェクト研究Iの受講生が各々の専門を活かす形で活動に従事した。大学院生にとって、以上の活動を通して被災地の現状を知ると共に、各々の専門性を伸ばす機会になったといえる。